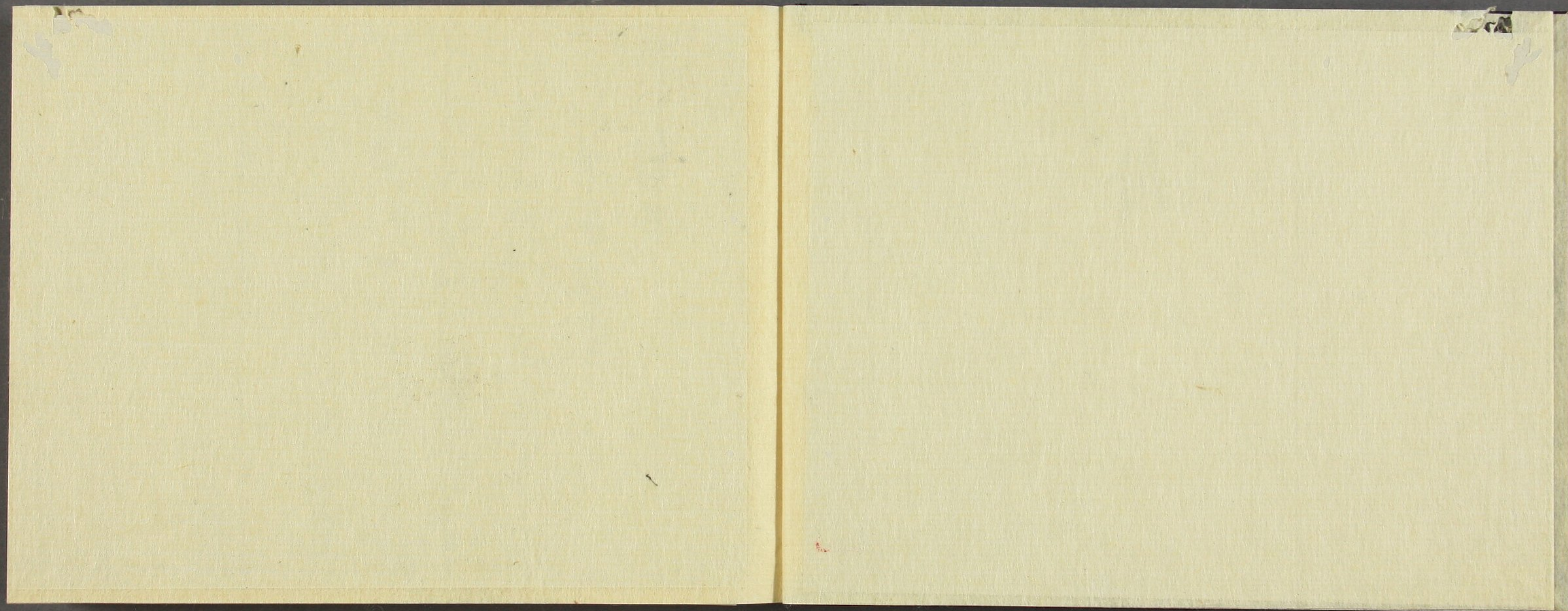


海





浮舟

以舟為卷名

舟より記す一舟名は舟と
この舟記舟舟舟舟舟舟
兼大將正六方舟正月舟
三月舟舟舟舟舟舟舟舟

宮様みゆのちやめ

自去去年二京院の對

しつし浮舟君とみ出物

つるも也

とくし能かともは

うらまぬれ俗姓と推是

給也

うらまぬれ俗姓と推是

自去年中君にまゐられ

誰人ともうまの御也

何とと嬢姑のかぶり

あるうらむくも

うらむくも

かぐもつちり記事ゆい

つくけつるもうらまぬ

事御入嬢姑一物と

お印す也

自去年中君とみ出物

あつらひうらむくも

始ありくく申君のおも

よきことなり
まは中まは嬢姑のふま
てのくし給ふあさねえ
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり

まは中まは嬢姑のふま
てのくし給ふあさねえ
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり

富たおむさふさなり
と知給ふあさねえ
つね給ふあさねえ

おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり

おむさふさふさなり
おむさふさふさなり
おむさふさふさなり

まきまき外よりわらわ
しあつげわらわら
申す見え及さる
あ也

んまのふふら 申す
まきまきあつげ
わらわ

まきまきわらわら
申すわらわら
— 白ふら 嬢わらわら

わらわらわらわら
まきまきわらわら
らわらわらわら
ちち申すあ也

まきまきわらわら
申すわらわら
らわらわらわら
ちち申すあ也
まきまきわらわら
申すわらわら
らわらわらわら
ちち申すあ也

る一始とて我身は是る
しとてさうも也申さる
きわうにせえん—あま
もくふんあま—いふ
ものゆか—記すよ—普
通の煩悩とて人の教
よちうての始とて
かろく—
神のいふ—
あま—

神のいふ—
神のいふ—
—
もが—
ち—
あま—
あま—
あま—
あま—
あま—
あま—
あま—
あま—

ばおれはしやうけぬ
ふく一人のまのちりぬ
京のむくぬのさぬ
ふくちりぬこと 不十分
也は調練勝也天下大士の
事徹し十分なるは
人のまのちり人情まのちり
してゆまのちりぬ物也
漸く成就するは根
ふく成就するは

又ふくちりぬの中なる
のまのちりぬ

弟子也是は自らの
まのちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ

ふくちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ
ふくちりぬ

みちかゝる人七
昔と忘ぬ人の不審
さうはつて
世のふいふごとく
申すのら也世をた人の
あつてふよ来とけぬあ
りさゆとれ印とくよ
つけて美めんと大切よ
是く一と好む
わんふとてう好むに

美の心

言はらるあま
自まつきめをさ
はく者大志の紙身と
つと好む一と好む
さうはつて今も
給也されも美の對面
一好む一と好む
申すの心手物也
幸月もあま

は暇つてくゝ多れと云
ふと云ふまきうてんた
一 薙のうらより今日
てう一ろいぬり中
君との同りも也
けりも守治ちとて
より申るよ薙のねん
比るり一才勿論也
後年月をくくはる
と白字の音にさうぬん

一 っし別殿の事なれ
元まれ由緒とあつて
らぬ人なるといふ也
早う一と也いふ
後おのふかんと人の
もいふと云ふも一
中くうかきうぬる
薙申るは身つてん
人ちるうれ人つて
不おもるも好也

ありとせしむ 申すの
に友のしるもゆいし
ありぬむうちらふも
に程さしぬうしるに
と也

ほろよこころんも

六君よはらふも也

あやしはらふも也

おとしはらふも也

白ふ六君にあらふも也

あひししるに申すも
もうはらふもにあらふ
もはらふもにあらふ
もあらふもあらふも
と也

正月乃ついに 蒼世

おそれ正月也白ふ申す

も年娘もあらふに

もあらふ也

あらふもあらふも

軒しそふに別也つこふ
はきくは物ちよのわうに
ふをうきわうしんつ
むも也嫁要恒胡乃
艶中ちるは皆つこ
ふ也けつこわう日記
まみさうりこれ後ま
まきくしんそふなり
そふてあふさくそふ
系ちまみえさう

けつこふに浮舟まき
ふに右迄のふちま
まきつふのおも
うつく朝也
まきつふにふん

定治のふにうも
まきつふに
こふこふ 翁也
つふ朝也 中念
けつこふつらうて録書

色とりとりとるる

私簿よりしるす

花と云ふのやうに十

幅の縁飾也

きりりりやれ 又色

大柄も人お好也

此布はあつこい好也

浮糸乃ちちり放白糸

れおしする所はちりせし

ちと若面一好也うた

白富は差ぬ糸とらた

い好也

五つわ一好也

白乃調也

らうくきふ一七

おほえちるに白くあのみ

よふれともおほえちる

不審きよ又くはみ

え好也

けよ女代手より 申すの

つとぬるちまへ一系所よ
と献ちい弁槌也系ちよ
とそかきりしる物にられ
と同はよ献するもと見え
しり精魅と追邪氣
と後よりおるしとん

おほいとおやん乃
白雲にたり

今はのゆへー 白雲の中
君よ今ははひんよとよと

乃ゆへと也

むーいおはよよ 宇治
よ昔きあひん一人のむと
りれし又宇治よあつと
申るの乃ゆへ也

卯らんそつそらつる
文に新お月方れ人のふ時
こそはちよとをそいあは
給也

またみり 榎^下方書^言曰

江東謂樹枝曰——砂鷄シヤク

二音知名末太布利

木乃枝ノ山ノとらノとらノ

つらノむノれノ印ノ槌ノ

枝ノつノつノめノけノ也

まノみノめノおノもノあノぬノ

またノみノめノまたノみノぬノ也

根ノ榎ノとノそノり

比ノ中ノのノんノたノたノんノ物ノ也

まノみノめノとノみノんノんノ一ノ解ノ

細ノまノみノいノとノらノんノ松ノ

よノそノんノとノとノ西ノ院ノ守

乃ノんノなノもノうノたノらノしノもノ

みノらノみノめノうノらノおノもノ

またノみノめノふノれノめノおノ

まノみノめノとノみノめノとノみノ

りノ東ノとノとノくノ後ノらノとノはノ

まノとノとノみノ

あノるノ海ノ 中ノ君ノのノ割ノ也

ぬノりノ也

我亦了るふおんしゆて

二条院寢殿也

あつたよとよつて

作文乃事也は大内記は

或ア少輔をいひて道貞

とあつたりすより下に

及えたり 善家人伴信

うむこ也

とふともえりいひ

古人乃諸集也

氣よりもしもいひ

京よりも程はらとて

らうとて也

きりかよそいひ

誰ともいひはきつ

つと白く同如し

あふらういひ

大内記返居也

木し記事也

白字乃詞也

ちよとよふかふか

はーとゆるゆるよ

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

ちよとよふかふか

おのゆいといふん

賭弓正月十八日也

了清和天皇貞観二年正月

十八日東駕幸豊楽院

觀賭射内射り

内宴在焉

つとよりふといひて

親王巡遊のありて

人びとすすむありて

いふれ我身は昇進をよみ

はんともろけ治るまは

はつさけりいふる除目

をその秋也清の除目

縣百也うた内りも系

官を任むるやいふる

これ縣百也つた官

はつさけりいふる

かよきいといふる

これ内記は除目には

りる身は昇進をよみ

はきものむしある所か
るねし言ははくふん
とて然つゝもさし
つゝ中しちしちし
しつあるお存也礼情
乃常らあつる也
ふつるはし 白子れ
は記子のね也
つらふすむん人
白乃詞也ニ孝記は

人とはも〜(5)のね
な〜もさしは
内記の詞也
おねはも記し 書子
別也乃れはもさし
き〜もいふしは
人れ知し〜記子の借
乃人〜さし〜作云
うれもさしは子
〜也

くほてうら出物いれし
不中然事とは早し
くは是程よりなりし
とまゝの如也人情
くはこれより
て知一念に禁する
也儒之幾を情に未
わしるなりし
未始よは過びあ
欲とみまうくる

花人より
出雲権ち時方也
よ左米門大吏とあら
人也

白はんの昔中
あし
まり
ま

いふに、白子に好色好
し好くは行進もろく記
せうされと事たつらうと
たふさうらうらうたふらあ
と記せえらう好くあつと
御座れぬ
公おはさま也
此の人のよき事
字は
大日記とてし業は

言はば、其乃家人好し
きりて日記も也
ふりてまた人を
白宮乃事すらんお
とてらうらう日記の事
いふ申也
いふは、伊と藤竹と
あつらう今あるいふとあ
新也、東屋よ山甲少記
らう果あつらうは

三四人

これのおまゝのれがはな
ニ系院より見ゆひ
人也

ひさぎつらふあはれま
上へゆくとすれはる心
也申あふとく似る也
とよあるとん 物縫とん
折目紙付る也
こころを結るも 深あの

母具一とあはる石と
まうとんともや
也母上り家よあはる
とふとはえとく子あ
一記と也

とゆいことあつふ
兼は除目とて出あ
らんも也

おゆいともひとく
御あふり兼の心出あ

きくはは出らしくは
うらゝんに名了能也
むしりも人 右近志
をさる人きくははの
事と心業にあらはる
らんと也

出たてはははは
しつらあははは
石山詣給てのしに
く物給てはは

又あらは 今糸入出給
よと給てはははの糸
むしり給てはははの糸
ははと也

これおと
中秘 おとくは母小方也急なる人
と也 弄義うらゝんのか
いしちうらゝん石山詣と
ははと也
むしり今世ものおと

ちんくおびば嬉しうし
てゆらわらるる人こそ幸
いあれ急ちる人は仕合
もよまうしうれし也
ちんくしにやあしは

ちんくしにやあしは
おのいせはもい乃右也右近
の母也おのいせとあし出
しんくしにやあしは
ちんくしにやあしは

ちんくしにやあしは

けよにくきもの 白子系
院の事しあしは
給也

ちんくしにやあしは 中君也
しんくしにやあしは

中君よしんくしにやあしは
ちんくしにやあしは
しんくしにやあしは

ちんくしにやあしは

うらなひ也

伊予守 親族也

中身也 公ありん又

と命まじし

これし うらなひ也

まに命ある也

よりしうらなひあり

足十分也 大方より

りしと

名くらふ、 女山方より

むらり車也

おのりしうらなひ

ちうせり

大親大捕 仲直六首 此家

人通定、とくとも 只今立

まて 治くも ちうせり

とくとも ちうせり

一 ちうせり

ちうせり 格子

みちより ちうせり

鹽よあしむらうふん
我もくろくそ 右近せく
わががらう也人のみ
まののゆきも
おともたふと 董の供
乃人はりも并居の方
よちてこよはさ
る也

あまあるよれ 今敷乃
品ははゆ切ある心志也

あまふさふ人あまこ
まも夜ぬいぬい
くけくくくくく
いんつゆ

ニ事院よその事
つら人のおのむ申
いけりぬいぬい
まもまもまもまも
いぬいぬいぬいぬい
これ右近をりよ

けりてはなむかひのむね
て白きものなり也

と記すは 宮乃家司出
雲持のまゝなり

よあまのしく 右近の記
こゝろなりて 白き
と知る也

とありて ありて
中くはくとも 記
おゆり白く 記也

人にて 書

けりてはなむかひのむね
右近の申調 母のおま

てきむとくむのま
く記す也

右近の申調 母のおま
り記すも ありて
記すは ありて

おはよう

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはようございます

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

あつくあつたはなまはなま
い何方しやとおもま
とよしはあつたあつた
ままいしあつたあつた
ままあつたあつたあつた
はらあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
又下いあつたあつたあつた
近の割もあつた
あつたあつたあつたあつた

まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた

まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた
まはらあつたあつたあつた

ま—此より爰にあ
き故物忘とてささくせ

うこいあ—とておんい

白宮の右に北の門に
くをいふ故より海舟の信
暗ささうとせられもさくうよ
てう—とあし—とあし
給—と我もさうとあし
白くぬい

い—とあし—とあし
あし—とあし—とあし

らひ—とあし—とあし

ま—とあし—とあし 申す也

あ—とあし—とあし

白宮とさうして申すの如し
思出まことあし—と白宮に
う—とあし—とあし—とあし
とあし

む—とあし—とあし 母乃方

よ—とあし—とあし

よ—とあし—とあし

月つきははくくももああららししも

ららししももああららししも

夏なつははくくももああららししも

よよおおももととららししももああららししも

くくああららししももああららししも

りりももああららししももああららししも

自みづかららししももああららししも

いいももああららししももああららししも

白しろ朝あさ也

大おほのの君きみのの 夕ゆふ暮ぐら也

よよももああららししももああららししも

ああららししももああららししも

思おもふふ也

大おほ君きみははささららししももああららししも

いいももああららししももああららししも

都みやこのの人ひとははささららししももああららししも

ああららししももああららししも

つつららししももああららししも

今いまももああららししももああららししも

花はなののううららししももああららししも

あはれなるものいふ所
と也

さうにふらふらふらあまの地也
まじくはむかひあはれ
きんちんしんしんうらうら也
海女の心と案のこり
つねふくてあはれ也

此詞をとりにて道達地
あはれつねふくても
あはれつねふくても
こねとみよとれはあはれ

ちうにふらふらあまの地

あはれなるものいふ所
まじくはむかひあはれ
きんちんしんしんうらうら也
海女の心と案のこり
つねふくてあはれ也

二重院

あはれなるものいふ所
まじくはむかひあはれ
きんちんしんしんうらうら也

あはれなるものいふ所

定る紀世と命より
と早ひさはらをも歌
のほつとまをいあ
す——あつとつとけ
てり

つとつとつとつと
よとつとつとつと
——つとつとつと
つとつとつとつと
らとつとつとつと

つとつとつとつと
つとつとつとつと

よきりあつとつとつと
夜つとつとつとつと
つとつとつとつと
はけつとつとつとつと
むつとつとつとつと

腹立つる也

つとつとつとつと
主上つとつとつと

夕暮は見えぬもやさ
きぬゝの作しうされ
も力ぬゝ先速惑るは
すろちる心もさう
顯證ヤつゝ見ぬるを
うみわうもあてた
ひまむらうもつらう傍
の人むさくはなして
うゝゝゝゝゝゝゝゝ
いり

はゝゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぬゝゝゝゝ右近作
まゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝ
真ちんちん思惟るは

ふらふらと歩くと
自覚はあつた
中を歩くとあつた
始は歩くとあつた
つらつらと歩くと
のつらつらと歩くと
人だつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた

つらつらと歩くと

つらつらと歩くと
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた
歩くとあつた

いふははるるのふりしむらん
浮舟の事と自ら言は
つるははるるの道一
如くはるる事は事の中
君の百はるるの事
うゝはるる

ゆゑはるるの事

白雲はるるの事
海にはるる中君の浮舟
るるははるるの事

うゑははるるの事
はるるの事

はるるの事

白雲の中君の浮舟
はるるの事
はるるの事
はるるの事
はるるの事
はるるの事
はるるの事
はるるの事
はるるの事
はるるの事

白子をくらあー記うん
よろしくなりぬるが
里姑いも也

夕ほつこ右左ね 白子あ
寝殿よりし對也

宮ももまおほつあ
明石中宮也

みろつにふらふらあ
善とみろつに也白子
乃ん也

こぶれりけるあーん

う記あのみまおやー

善乃ひーいりあもも

好色乃まーらまをん

給白乃ん申也

道つて所し ちあも也

善乃乃んあーとつあを

り此い白子あれ乃姑いや

あも也さねえは海あのみ

記知給えときあいふあ

物つゝととらむし(留)あり
そのゆきも也

いふ早しうらん 蓋ふ

白紙う紙ありさうとく

うつゝんとおほし

はつゝよりしゝふよし

さう、後者也 大吏たは

大吏は方。宿也

右迄つゝあうくし

右迄つゝもあひうくしの

蓋乃の供より事断

絶てありしつゝと

つゝつゝとつゝつゝ

久しうしつゝつゝ

ちひ也

月七きつゝ

正月七つゝ也

あなうらなうら 白紙

事紙早しうつゝ也

紙つゝつゝつゝ

是のいふ事はあ
あつたことな
つても
けしきもた
まはた
み人の
自まつた
もの
り也
ふか

字に由ら
あつたことな
つても
けしきもた
まはた
み人の
自まつた
もの
り也
ふか

きつ月さうと月夜
ちんちん

かき記乃すんた

さう記の先ハ鶴れ?

そ也いお禮よハ醫者ハ

しりりさう記のさうと

鶴ちんちんさうと

さもつら又白鷺さも

くく也 家階の守

かき記のさう記のつて
おの

平舟にさうとさう記のさ

け守ハ鶴のさう記のさ

おささうとさうと

記さうとさうと

さうとさうと

ともさうと

若ともさうと

秘 醫者さうとさうと 調優ちん

さうとさうと

ちんちん

うらやまの心はわづらひ
葦のと絶えさうむらさ
あてらるゝさむらさ
あむに橋より踏乃字の
心もあふ
さうのこよよのあむら
さ乃字よあふてよ
里路のあむらさ
と也
あむらさのさうむら

禁中に由作文も
すろろる事

あむらさ

あむらさのさうむら
さ乃字よあむら
雷のあふて
雷のあふて
あむらさ
あむらさ
あむらさ
あむらさ

然と申すらんうらなは
善よりなりしをいふは
し。そのうは調行の
まじ

いふことあり

字法と申すらんうらな

いふは自然の理なり

かたはりちりちりつん

韓人百人百葉 善と

とらちりちり然といふ

つんつんつん

おほき也

此君も然る。即ち

以年たりし不害也自

宮ハのみ葉子誕生意

ハ柏木巻也云々此二三

方ハ鬼と云うや

流舟莊子此等法作

おほ乃さば

私云ふらん

けらうもあつらふも
るも所あつらふも
つてしつらふも白み
く董いふんよも
思惟ふに故に顔色
年齢よりいふも
人の心も一に
董の衣も一に
ておろちるも一に
ねとらふも一に

いほつもも
内記も式アサ補も後式
とて一も一に
友の除目よ式アサ補
任一も一に
詔書勅書宣命も
式アサ補獻策首試
とて一も一に
ひにあけるも一に
指費れ下結と一に

上縁より下縁までの
歩行にちりこもれば
とさふとありまうぬ
あふまうぬにおくあふ
とあるうぬ也は行は
かろ人のふまうぬ
蓋のまうぬらまうぬ
まうぬらまうぬらまうぬ
は方とに彼宿のまうぬ
うぬらまうぬらまうぬ

てもうぬらまうぬ
はらうぬらまうぬ
は浮舟のまうぬらまうぬ
あうぬらまうぬらまうぬ
まうぬらまうぬらまうぬ
うぬらまうぬらまうぬ
今ももまうぬらまうぬ
こまうぬらまうぬらまうぬ

年好もいふこと

手はさかしく分也事

あつても咲りいふ花や

此也

さるはのこも乃こ

ほつちの記さすちる事也

息とけりえ乃さくし新也

経ちむとあつよよく似

つるさゆ

ふん記録してあつた

自言乃いふ記さす人

きとけられ給也

とさつとつとこれ け家れ記

也周幅ち。お領さけり

そりよ作を記さる家

るらあつちら部あつて

将長すつた也

あつたむしつた

いあよあつちるもあつた

ちる

つねに一人とせよ

六甲申馬のまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

は方の叔父周橋守、若衆

は方をとあつむ

ふくむまゝにふくむ

は方の叔父也引ふ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

ふくむまゝにふくむ

しやいもさるはと 女に言を
うれやとめ人よ 我こそ
引とりてまもききよみあり
ゆきよとらつてしちあぢやう
乃返答はちねん

いづくおほすちる人
白雲のうしろのおしき
いにれやとめはあしき
ゆきよとらつてのうれや
れちよとらつてのうれや

いづくおほすちる人
ゆきよとらつてのうれや
いづくおほすちる人
ゆきよとらつてのうれや
いづくおほすちる人
ゆきよとらつてのうれや
いづくおほすちる人
ゆきよとらつてのうれや

あぢよとらねん人のあぢよ
白雲のうしろのおしき

あはれいふ

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふ

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

あはれいふのうた

きりぎりす

あつたつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あちたにちるひのまき
もしくぬかある様

甲辰名を親身にせよ

甲秘の名とぬか治とす

名標うすよりせり

いしくとす字妙也里

名とすひてうさひん

らに又さぬけうと

る感あり也以守新推送

部一は是或マと

入る

知るよこし

蒼まむくぬけ白宮に

又あひしあんと口

しん

いしくぬかある様

白雲天雲も統共用し

甲辰名とぬかある様

えりぬく親身にせよ

いしくぬか

南のしらべ

行^下女の愁^下なるは方^下に^下か^下の^下影^下
く^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
白^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
い^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
叶^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
い^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
え^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
り^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下

はれくも月影のあめ

い^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
月^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
茶^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
ん^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下
ひ^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下の^下影^下

女宮のあつたなま

女二宮也

あゆむもや茶の詞女
二宮とあるりや

おほいさむの用控也
大いなる年しぬる

女二宮よりいふおのむらに
中世ありし

世のいふおのむらに

世中とともちかむて出家

あつとせむいふおのむらに

尋常ちかむとともちかむ

ともちかむとともちかむ

ひらきし

かゝるいふおのむらに

女二宮よりいふおのむらに

又他ともすていふおのむらに

女二宮よりいふおのむらに

ちかむとともちかむ

ひらきしとともちかむ

おのむらに

いふおのむらに

女二宮よりいふおのむらに

由返る也 嫉妬のふは

如二落より向ふもゆるり
まじさるるうらむりをも
あるははるるもゆるり
このまゝなるさゆ
女二宮よりなるにたるま
れとも内書く人のあ
さゆやちるるもゆるり
まじはるるもゆるり
ふらるる障子也
この内記たる人のお書

内記たる人に内記書
也右定書は父大親大
楠仲信也善の家人と
まじつらりし書つるて
まじはるるもゆるり
記也
まじはるる下書也
まじはるるもゆるり
自宮のまじはるる作れ
と願状也

あつちのちのちのちのちのち

作れよよよよよよよ

さうよあああああ

俺めがもももももももも

さうよあああああああ

善の方のちのちのちのち

れいれいれいれいれいれい

くらくらくらくらくらくら

いれれれれれれれれれれ

白雲のちのちのちのちのち

あつちのちのちのちのち

くらくらくらくらくらくら

つたじ為母のちのちのち

一とまきくゆくまきく

くらくらくら

少将乃ち 浮舟のちのち

くらよけあああ

うらああああああああ

のくらよけあああああ

くらくら

早下して下さり

きりおとす人にもなむ

弁の中をきくしつらき

けく早ふたれ母乃調

言はる人の 申意のおんは

まかりし申意は ~~まかり~~ 自當

あつたしつらき

とら

申意はつらき

言はれしつらき

いふ思ふ言はれし

りや

あつたしつらき 自當

まかりしつらき

まかりしつらき

まかりしつらき

うらみのつらき

あつたしつらき

まかりしつらき

まかりしつらき

すけしとてあはれ
あまのつげもあまの
しんよあまのあまの

—

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

こいんこらこらこらこら
油也さきこらこらこら
ちんこらこらこら

受領し妻ちんこらこら

おはまのふたつこらこら

お母さんこらこら

おはまのふたつこらこら

ちんこら

おはまのふたつこらこら

ちんこら

油也さきこらこらこら

きんこらこらこら

おはまのふたつこらこら

おはまのふたつこらこら

おはまのふたつこらこら

ちんこら

おはまのふたつこらこら

おはまのふたつこらこら

おはまのふたつこらこら

ちんこら

女捕の家よりし 式子捕也
大内記也い所より見及
くは方々下人也
き一記ある事なり
何ともいふ不審なる公
とてしきなり
くは家 ことなるに思
推し何方のふとらん
ことなるに 陳言詞
前後お遠しとて

不審すなり也
さいものきらふの家
左東門大史何方也
去る所のきりいん
大内記通定也
こゆりふらねんとも
多子地也
六条院よきさいの二女の
明石申宮六条院よ
退出也

何る事ともし給

善の真の同好也

と云ふにこそ給へ

善も子細ありと推

し給へる事なり同好也

事倒る事 唯石中書也

日記の上とせんちふ事

上賓の政事也た改定書の政事也

或は其補を要する事

と陳るに故の進事

と云ふ也

と云ふ事おほむ事

白らむ事入らむ事

と云ふ事と善の政事

おほむ事と云ふ 夕暮也

と云ふの外は方也

これ善のほうより出ぬ事

この善の善のほうは

障子也

おほむ事と云ふ ひとく

申書の様子を

うねるに

大君の御心を

あはれに

まことの御心を

おぼえ

する

まことの御心を

おぼえ

する

あつ

まことの御心を

おぼえ

する

まことの御心を

おぼえ

する

まことの御心を

おぼえ

する

思ひて好むとて

少婦。つねよこばあめ

か物。道定也常に意

れよとてしりやほのそ

同くも今はふあふ

きよもはらうしてや

張と意つこちあら

波。あつこちあつ

君とてはあつこち

東のかつあつこち

我びそちうんと

いおこちあつこち

人よとてはあつこち

こちあつこち

あつこちあつ

あつこちあつ

あつこちあつ

あつこちあつ

あつこちあつ

あつこちあつ

おはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはよう

おはようおはよう

おはよう

おはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

おはようおはよう

不^ん道^んを^ん不^ん調^い
物^れの^ん施^を
神^也ひ^もい^一款^也

字^をぬ^りと^ふもの

中^内舍^人帯^劍具^兵仗^武

勇者^也

私^不能^人侍^任之^柄以^因曰

給^内舍^人随^身以^殊

撰^其爲^召仕^之帶^劍之

官^也

予^好む^この^衣と^衣

内^舍人^のむ^こる^も一

差^の家^人也^以右^近大^史

一^方と^差の^被作^を

と^也

と^好む^はあ^らう^て

而^れ書^乃は^柳余^あ

と^いふ^もい^く吟^味

一^と也^あわ^らう^は

乃^はあ^わら^うも^ん也

あやうしうのふりて

抽るうしうの時也

よれと字よかよも

わさびのなと文章に

らよをきんかふの

人これ然とりて

きし、夏のかくに

白ふろ神をりて

かくるおやうり地

右のうさくさむの

にほしめつれとびも

浮舟に平生にちか

しむ性ちうと自はる

後つ物もあつた

み物とと也

こらととらうとぬり

右のうおとら内舎

人これと也

きうまも 離る也

うれあむさうと

とよぬ人のあゝのまは
あゝとせ

さのいもいひやう 非常
よういゝてきあへん

ふれも煮る作の趣也
ゆくりふれちうむじやう也

景をもおきろくしき物な
しつてくくつりは内舎

人このまをとり
やれもちのうらまはし

免ふとこ細きし
らう盗ちまの用心よ
とらぬもよふらふ
也

こまゆいしるしりねん
君いおとむじよと
苦れもわくおと
松蘿乃其とらふ也
まふのいもく

むしにけいけい人の

大和物語云むいしほのく
うすむすめありたりよま
ぬ男二人ありて人いられ
玉のうらいにすむ男姓い
むえとちんいひたり今
ひとりのいふこの團れ人
ちりていしちねよまんい
たりには男とも年よまひ
うねるしら人のちよまよ
いしちよまいしちりそあ

かほいささしんよま
えをちと早うよま
乃ちよとねるい
ちりくれしちりよま
あしぬ物おにすれお
ちりやうおにけりれ
ははあさしんよま
女思ひしぬあの人
んきしちりちりいれ
まもくあまふれと

おきもねも目もよそ
つて家のいもよそつて
よろいよんきとみま
てろねもおおにすれ
まもねもまもねも
おじおこきおらおね
とこれらうせりあ
ありておく
年月はそ人のま
まももつてねも

ゆまのいもあひも
よあひも人のま
のおもあつちるに
つひあつちるに
つねよふつていも
川よつてあつちる
あつちるに
あつちるに
あつちるに
あつちるに
あつちるに
あつちるに
あつちるに
あつちるに

おらん早もくうししては
かけあふはまれくはよ
なほひまふちまじあるこ
とをいひ給ふらるる
もありあるこころの
うはまひらうらふと
うしにぬもく折し
事なりともあはれ
いふよふにあらざ
まじよまじ給ふらる

は川より流るる水も
まじぬるうらふは
まむらふはまじぬ
まじぬはまじぬ
まじぬ一人に
まじぬあつらふ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ
まじぬまじぬ

世よりみんこおひくもりの
川よりうけてきてりる
よつとあつらふなりお
ちあつたしんてのい
おつたよこおつたふ人あつち
ううわんたちうし
おらふぬ

けさうする人のあつた
あつたよこおつたふ人あつち
ちあつたよこおつたふ人あつち

ちあつたよこおつたふ人あつち
ちあつたよこおつたふ人あつち

あつちううわんたちうし
ちあつたよこおつたふ人あつち
ちあつたよこおつたふ人あつち
ちあつたよこおつたふ人あつち
ちあつたよこおつたふ人あつち

ちあつたよこおつたふ人あつち
ちあつたよこおつたふ人あつち
世のあつたよこおつたふ人あつち

ある故に、きつりと通
る記号也

おまゝの式、おまゝの
むすぶ、ふぢぶぢま

友右也、白紙のきつり
ある記号也

白紙のきつり、
おまゝの式

おまゝの式、
おまゝの式

おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

おまゝの式

おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

おまゝの式、おまゝの式

自由にしてははるかに
くはるかに
あは

あはるかに

あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに

あはるかに 我は

あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに

あはるかに

あはるかに
あはるかに
あはるかに
あはるかに

あはるかに

侍従ふと白紙いひてけ
て薫ふふよきいさや
うーちちうーんと拍巻
しぬくたもーる也
ふもくちうー さいさ
也あふいもんも
系よりとこしあふい
とこぬ也いふいのみ
りも也
ちあふすま い ます後者也

台使也

さしおひいふさち
不用也いふい射也
ちらふーいふい
いさくい人い
は方方ある人い
つて侍従よあふい
いさくい人い
侍従、調也
つらあふい

白くやぐい無切らるる
うらみもあはれは
はもあふいしとあはれ
つし

さきとけいしとく白雲の
あはれとあはれ
しの夜あはれ葉の
作あよとあはれ
とあ

あはれとあはれ

せりて侍はるるとも集
あはれとあはれ
あはれとあはれ

守家一犬迎人吠放野
牛引犢歸 朗詠

さきとけいしとく
あはれとあはれ

あはれとあはれ
あはれとあはれ
あはれ

かみくはるりのひりて

髪は脇乃下よりふいに

くる絆也

まぬすそふとらて

侍はついでしすそと方

かきりてゆくと

あかりとつよの

源障

つらみらふうこらるわて

好色ららよ也

ごまらぬ人の侍也

いづきあはると

我はあたるうつと鬼

と作らる人のそ也

我し人の白くも七人

めとほつとぬくと也

大あわうし 夜行と

ら整也

川をうらめしくすむと

志をよつとあはると也

山也諸君ニ答なり

私白色のつらぬゆゑの儀

深きにあつたをきき

花詞のわづらひのつらぬ

あつたを分はるといふ

つらぬ

右迄にひまをうら

右迄にひまをうら

私淑するにふまふといふ

つらぬ

つらぬ

つらぬ

ありさゆをいふ

むこふ

おしうら

わづらひ

わづらひ

つらぬ

つらぬ

つらぬ

董也

うらさ福よひひるも人も
身成すれち成すらんさ福
よしみるぬ人もあらん
れもなうしてみほ
しむらういと思さたむ
る也
ちけらしむ身成すらんも
身とちけり死らんも
う此名いのころん也は

予視乃志より後
ん世より予也蜻蛉に
みえたり

何これ 常陸子浮
あつ一脈の弟ある也

ひれあやこ

しももみよがひをそつた
羊あやこらうらぬん
歩：近死地人命亦如是怪文
歩を了りて死地より

ほくを著しる喻也

こたひ返る事なほ

浮舟也

かたはらふらふにの中よ

入水たふらふにの中よ

うね世よとてあやふと

らうらうににににににに

白しらうににににににに

たふらふも 著るも

たふらふにににに

いふまじりてなほ

あつらふににににににに

益也ち也りてにににに

うね世よとてあやふと

人の心よらふ

解夢書曰夢見病人

死必死

とてふくことよとて人

乃あやうし

夢の本に記はる

もといふてありりつて
いふていふていふていふて

おもて

うはらうていふていふて

宇治乃寺也阿彌梨乃

ちちち

おのまていふていふて

誦經乃料也

おしよ又あしんていふて

今生よりいふていふて

もありりつていふて

乃まよふていふて

いふていふて

妙表表ノ義ありとて

いふていふていふて

いふていふていふて

表鏡斗ん

すはらうていふていふて

あはれいふて

いふていふていふて

あはれおぼやかし
あはれおぼやかし

あはれ

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれ

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかし

